

二〇一六年一月一〇日

漣の綺羅に紛れて鳩浮ぶ
馬の字の翔るがごとし吉書揚
幼子の不平不満に初笑

人混みに赤襟巻の夫を追ふ
一〇二六年一月八日

海山の幸もちよりて馳走初句会
神さぶる糺の森の淑氣かな
一〇一六年一月七日

みどり子の百面相に初笑ひ
古井戸の蓋に集合寒雀
天守より見渡す城下淑氣満つ
四圍の山模糊と迫りて春まだか
籠緩むやに大岩の薦枯るる
百歳の祝い花来る七日かな
風癪のままに打ち伏す枯野かな

大鍋の湯気立ち競ふ屋台店
初電車いまし傾く伊予の海
堰に落つ水の奏でる早春賦
寒の入圧力釜が笛を吹く

千せ澄康 む董ぼ明日たむきも千あもか
いじ子子 べ雨こ香子ベえと鹤ひるか
鶴

着膨れて判断力を疑ひぬ
落暉いまうち広がりし枯木立
寄せ花の要に凜と水仙花
初鏡少し笑うて見たりけり
一一〇一六年一月五日

亡き夫のセーラーを着て赤き村
晴着の子帰路はおんぶや初詣
音立て靄に変はる夜半の雨
行員の辞儀九十度初仕事

吾娘に受け継がれ我が家の節料理

毎日句会みのる選・一〇一六年一月一二日

よし女
こすもす
むべ
せいじ
あひろ